

英語ができない楽しみ

阿部公彦

英語で用を足そうとしてうまくいかなかった、という経験を持つ人は多いでしょう。「せっかく学校で英語を勉強したのにさ〜」と思う。気持はわかります。そこから「実用英語じゃなきゃだめ」とか「使える英語を教えろ」といった苦情が出てくる。

でも、冷静に考えてみましょう。私たちが「できない」のはなぜか。多くの場合、理由は簡単です。表現が思いつかないだけ。あるいは聞き取れないだけ。

なら、どうすればいいか。これも答えは簡単でしょう。使いそうな単語や表現をあらかじめ勉強すればいい。電車に乗るとき、商談のアポをとるとき、不良品の交換をお願いするとき。状況ごとに必要な基本単語はたかが知れている。文法の土台さえしっかりしていれば、その先は自分でできる。学校の勉強はそうした基礎作りのためになります。

ただ、準備をしてもうまくカバーできない領域があります。難しいのは空間表現です。翻訳の専門家がよくこんな指摘をするのをご存じでしょうか。訳で難しいのはたいていメインのストーリーがまだ始まらないところだと。小説などの冒頭では、舞台の中で人物がどのような位置を占めるかを示す必要がある。人と空間との関係が大事になるのです。ところが日本語と英語では、その空間感覚が微妙に異なります。「男はビルのちょうど裏側に立っていた」とか「あごにバターがくっついている」といった、いわば“一歩手前”の表現が意外にも手強いというのです。

しかし、ここはまさに「文化の綾」。空間表現には、「私」をどのように言語的に延長し、まわりの世界と付き合うのかという心理があらわれ出ます。この心理空間の組み立て方は言語によっても、土地や個人によっても異なる。関西に行くと、タクシーで「なあ、運転手さん、エアコンの温度下げてくれへんか？」などと話しかけている。こうした呼びかけには、対人的な距離の近さがあらわれていて、私などは少々びっくりします。

身の回りの空間や他者とどう言葉で付き合うかは、机上の勉強ではカバーしきれません。試験でもチェックしにくい。実際にやってみないと身につかないからです。たとえば誰かと車のパンクを修理したり、山に登ったりすると、「あ、そういうふうに言うんだ」という感動的な瞬間が訪れるはずですよ。

鍵になるのはyouを使った表現だと私は思っています。英語の心理空間の軸にあるのは、I-you関係。ここが日本語と根本的に異なる。Here you are! / It's up to you. / You must! / Perhaps, you want to ... ということのない表現でも、微妙なニュアンスをうまく伝えてくれる。どう言葉にしていかわからないときは、「you系の表現」を試してみるのも手です。

それにしても空間と心理と言葉の関係には興味つきません。中心にあるのは、難しい言い方をすれば、「実存」なのです。個々人の存在の匂いが、言葉には滲み出す。だから、画一的な処理がしにくい。むしろ、うまくいかない不思議さを楽しみ、失敗を糧にし、ときには黙って考えてみるのもいいでしょう。そのうちに、単なる「スキル」以上の何かは身につくはずですよ。

阿部公彦 (あべ・まさひこ)

1966年生まれ。東京大学文学部卒。ケンブリッジ大学で博士号取得。現在、東京大学文学部教授。著書には『英詩のわかり方』(研究社)、『英語文章読本』(研究社)、『小説的思考のスヌメ』(東京大学出版会)、『詩的思考のめざめ』(東京大学出版会)、『英語的思考を読む』(研究社)、『名作をいじる』(立東舎)など啓蒙書と、専門書としては『モダンの近似値』(松柏社)、『即興文学のつくり方』(松柏社)、『スローモーション考』(南雲堂)、『文学を(凝視する)』(岩波書店、サントリー学芸賞受賞)、『善意と悪意の英文学史』(東京大学出版会)、『幼さという戦略』(朝日選書)など。『フランク・オコナー短編集』(岩波文庫)、マラマッド『魔法の樽 他十二篇』(岩波文庫)など翻訳もある。小説で1998年に早稲田文学新人賞受賞。ホームページは<<http://abemasahiko.my.coocan.jp/>>

